慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブランキに関する断片
Sub Title	Fragments sur Blanqui
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.3 (1961. 3) ,p.159(1)- 177(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19610301-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山田雄三著『国民所得論』
鈴木諒一著『国民所得の基礎理論』 ……大熊一郎 85
大川一司編『国民所得』

グリーン編『プロテスタンチズムと資本主義』……渡辺国広 86

石原忠男著『恐慌の経済理論』……常盤政治 87

今津　晃著『アメリカ革命史序説』……中村勝己 88

今井則義(他)著『日本の国家独占資本主義』……寺尾　誠 89

伊東勇夫著『現代日本協同組合論』……高山隆三 90

池内信行編『中小企業論』……佐藤芳雄 91

ブランキに関する断片

平井　新

一

ブランキといえば、とかく革命的な秘密結社や政治的暴動の指導者が連想されており、それを裏書きするように、しばしば引用されるのはエンゲルスの次のような評言である。いわく、「ブランキは元来政治的革命家であって、人民の悲歎に同情をもつ感情のみによる社会主義者である。しかし社会主義の理論ももたなければ、社会救済の一定の実際的提案ももたない。……ブランキは元来「行動の人」であって……前代の革命家である」と。(1)

(1) マルクス、エンゲルス全集　改造社版、第十二巻一二七。

つまり、ブランキは、無哲学、無理論で、ただただ現状破壊をめざして猪突邁進するところの衝動的な革命主義者であるというのである。たしかにブランキの中にはこのような連想や評言に十分抗しきれない側面があることは否むことはできないが、しかし、このような側面だけをしらべてブランキを片付けようとするならば、それは明らかに一方的な速断であって、ブランキ自身にとって酷にすぎるものであろう。エンゲルスのブランキ批評の意図がいずこにあったのか、うかがい知ることはできないが、ともかくこの種のブランキ批評がエンゲルスの権威に助けられて広く行われ、今日ブランキ批評の一方の代表的見解となってしまっていることは疑うことができない。久しく行われていたこのようなブランキ批評の甚だしく不当であることを初めて指摘した人は、修正派社会主義の創唱者として知られているベルンシュタインであった。しかし、彼は、この問題を修正主義の原典と目されているその著作『社会主義の前提と社会民主党の任務』(一八九九年)の中で、マルクシズムの分析に関連して提起したに止った。(1) 彼の後をうけてブランキ再検討のための系統的な研究が漸く相次いで行われるに至った。その主なるものを挙げれば、まずジェヴァエス、(2) ドマンジェ、(3) メースン、(4) 小生等(5)の研究、

さらにドマンジェの大著[6]、それから最近に出たスピッツァの研究[7]などがこれである。

（1） Bernstein; Die Voraussetzungen des Sozialismus u. die Aufgaben der Sozialdemokratie. Neue Aufgabe, 1920, S. 60—72.
（2） Zévaès; Auguste Blanqui patriote et socialiste français, 1920.
（3） Dommanget; Blanqui, 1924.
（4） Mason; Blanqui and Communism. (Political Science Quarterly Vol. 44. 1929)
（5） 平井 新 ブランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説（三田学会雑誌、二十五巻二号 昭和六年）
（6） Dommanget; Les idées politiques et sociales d'Auguste Blanqui. 1957.
（7） Spitzer; The revolutionary Theories of Louis Auguste Blanqui. 1957.

二

およそ革命家と呼ばれる人々の中でブランキの生涯ほど波乱万丈をきわめたものはないであろう。二回の死刑宣告、十五回の訴訟事件、三十三ヵ年余の牢獄生活、十ヵ年余の追放、加うるにあらゆる

中傷と迫害と欺瞞。しかし何ものも彼を打砕くことができず、何ものも彼の志節を奪うことができなかった。彼を何よりも特徴づけるものは、プロメテウスを思わせる彼の絶倫なるエネルギーと不撓不屈の精神力であった。革命家といえば、とかく、理論の弱さ、知性の乏しさ、勉強不足を連想させる。しかし、この連想はブランキには通用しない。ブランキに接した人は誰でも口をそろえてその非凡な知性をたたえる。かつてラマルチンはブールジュ事件の法廷で彼のすぐれて高い学識に心から敬意を表し、ミルクールは彼の深い教養をたたえている。それは彼の頭脳が常に新しい知識を探求して止むことがないからである。何一つ彼の興味をひかないものはなかった。彼の研究心は自然科学、哲学、社会学、経済学、医学と行くとして止まるところがなかった。彼はギリシャ語、ラテン語の古典語からイタリア語、英語の現代語に通暁しており、この知識はまた彼の言語学の研究を可能にした。彼は広くこれらに関する雑誌、単行本、地図を無上の喜びをもって耽読し、常にノートをとることを怠らなかった。しかも彼は生来、非凡な記憶力に恵まれていた。

いつ、どこから彼はこのような知識を獲得したのであろうか。全生涯を日夜蔽う革命運動のために東奔西馳する彼に安息と思索の場を与えたものは相次ぐ彼の牢獄生活であったのである。獄舎はいわば彼の移動研究室ともいうべきものであった。

フォントヴローではクールタンの近代百科辞典を座右において全般に亘る知識の吸収と整理につとめ、モン・サン・ミッシェルではツールやブロアに入獄中のとき以上に特に政治学を研究、ベリルでは経済学と歴史学の研究に熱中した。ドウランでは政治学と歴史学、サント・ペラジーとネッケルでは二月革命史と哲学と医学、そしてトーロー城では「泥にまみれた、ちっぽけな地球のことなどは問題にしない」で狂気の如く大宇宙の中に身を投じ、天文学の神秘と無限大に旅し、クレールヴォーでは、軍事問題を検討した。およそ人文的ないかなるものもブランキの知らないものはなかった。その教養は広大で、その疲れを知らぬ好学心はあらゆる学問領域に及んだ。数学、立法、各国の予算、政情等その止まるところを知らなかった。博覧強記とはまさしく彼にふさわしい言葉であろう。

ブランキは読書のかたわら常にノートをとることを忘れなかった。彼の短いノートを見ると、彼の読書や渉猟の範囲が驚くほど広く、無論フランスの文献だけではないことが分る。しかし彼の哲学、社会学、経済学に特に影響を与えたものは、古典であり、わけてもフランスの古典ではなかったかと思う。彼の政治思想や革命戦術もまた多くフランスから得たものであり、フランスの特殊な政治状況に関連して生れたものである。彼の論争は殆どフランス人に向けられた。フランスの実証主義者、経済学者バスチア、無政府主義者プルードン、第一インターナショナルのフランス支部の人々、チェールやフランスのブルジョワジーの代表者達に向けられた。

無論、博識なブランキのことであり、ヨーロッパの急進主義者達のことについてもよく知っていた。彼のノートの中にはラッサールに対する好意的な記事やシュルツェ・デーリッチに対する敵意ある批評などが散見される。彼は自ら強硬な愛国者でありながらマッチーニ、ガルバルディ、オーコンネル、コシュート等の民族主義者に反感をいだいていた。また彼のノートにはハイネ、ヘルツェン、バクーニン等の著作からの引用が見られる。マルクスとの関係については、次に述べる通り世人の想像以上に深く、かつ密接なものがあった。ブランキはいろいろな問題について実によく書いた。生涯、獄舎から獄舎という囚われの身としてこれほど書いた人は他にはあるまい。彼の原稿の大部分は今日までに失われてしまった。印刷されて新聞や雑誌やパンフレットに掲載されたものも今日では中々見ることはできなくなっている。その中、最も重要な政治的、社会的の著作は「社会批判」(Critique sociale, 1885)、「危機の祖国」(La patrie en danger, 1871) であるといえよう。

三

ブランキとマルクスとの個人的関係について述べよう。両人は会う機会があったであろうか。実際に会ったであろうか。

マルクスは一八四三年十月末、パリにきて「独仏年誌」を初めた頃、ブランキはモン・サン・ミッシェルの獄舎に監禁され、ここで重病にかかって、一八四四年の春頃までこの地に止っていた。ツールに移されてからも、なお病勢が悪化し、一八四六年春になって、やっと病室を出て訪問客と会ったり、少しずつ政治活動ができるよ

うになったのである。マルクスがフランスを追放されたのは一八四五年一月十六日のことであるが、マルクスのパリ滞在中は丁度ブランキの病臥中に当っておって、若いマルクスは十三年長のブランキと遂に会うことがなかった。

フランスを追われたマルクスはベルギーのブラッセルに落着いたが、この地で当時の種々の社会主義の体系、殊にカベーとワイトリングの体系を批判の篩にかけた。一八四七年七月、マルクスはパリで、プルードン批判を骨子とした「哲学の貧困」を出版したが、ブランキはこの書を読み、これを高く評価したといわれている。(1)

(1) Nicolaewsky & Moenchen-Helfen; Karl Marx, p. 127.

一八三六年以来パリに「正義者同盟」(Der Bund der Gerechten)と称するドイツの急進革命家を中心とする秘密結社があり、思想上においても組織上においてもバブーフ主義にならっていた。この同盟の前身である「亡命者同盟」(Der Bund der Geächteten)がフランスの「人権協会」にならっていたように、「正義者同盟」は綱領、組織共にブランキらの指導した「四季協会」にならい、あたかも「四季協会」のドイツ支部たるの観があった。この同盟も一時はワイトリングの共産主義思想に支配されていたが、次第にマルクシズムに接近することとなった。(1) マルクスとエンゲルスが正式にこ

の同盟に加入したのは一八四七年二月のことであるが、同年六月「共産主義者同盟」(Der Bund der Kommunisten)と改称された。マルクスは同年十一月末、この同盟の第二回大会に出席したがこの大会で長時間の討論の結果、マルクスとエンゲルスの主張した綱領と戦術の原則が採択され、同盟の宣言文の起草方が二人に委嘱された。この結果作成されたのが「共産党宣言」であることは人のよく知っているところである。宣言がロンドンで、しかもドイツ語で出版された時、あたかもパリでは二月革命が起った。

(1) この前後の事情の詳細については拙稿「共産党宣言前史の一斷」(三田学会雑誌第二十巻第六号)「マルクシズム前史」(三田学会雑誌第二十二巻第一号)を参照されよ。

ブランキは日夜、激しい闘争に追われていたために、この重要な文書の出たことを知らなかったようである。「宣言」の仏訳がパリで出たのは一八四八年六月事件の少し前のことであったが、ブランキは当時ヴァンセンヌに監禁されていたので、この仏訳を知らなかったらしい。「共産党宣言」は二月革命から始まった労働運動の敗北と共に政治の舞台から姿を消してしまったとエンゲルス自ら言っているし、仏訳第二版はブランキの死後に初めて出たことでもあるし、その上、ブランキ自身、「宣言」のことについては、どこにも言っていないところから見て、「宣言」は結局ブランキの知るところとはな

らなかったものと認めてもよいと思う。そしてこのような推定は、当時、マルクスの著作殊に「宣言」はドイツ人にすら中々手に入らなかったというベーベルやレスナーの証言にかんがみて大体において正しいのではないかと思う。(1)

(1) Dommanget; Les idées politiques et sociales d'Auguste Blanqui. 1957. p. 376—377.

一八四八年三月十四日、マルクスはフランス仮政府の一員であるフロコンの招きでパリにきた。この時、彼は銃剣に訴えて、ドイツ共和国を作るために軍隊を組織することに極力反対したが、このようなマルクスの態度は、彼がフロコンやルドリュー・ローラン一派と親交関係をもっていたことと相まって、マルクスをブランキ党と対立させることとなった。二月革命の人達を描いたヴィクトル・ブートンの回想記には、マルクスはブランキ派の人達とは交際しなかった。ただマルクスの親友で、共産主義者同盟の委員であったウィルヘルム・ヴォルフだけがブランキのクラブと多少の関係をもっていたと書かれている。(1) その上、マルクスは二月革命の時には、パリには僅か一ヵ月足らずしか滞在しなかった。それはドイツの革命のために帰国したからである。こんなわけで、マルクスはこの時期にブランキと会っていない。

(1) Bouton; Profils révolutionnaires. p. 178.

ところが一八四九年六月、ドイツからパリに帰ると、マルクスは「すべての革命党と」会っており、無論ブランキ派の人達とも親しくしている。しかしブランキは、この時もドーランに監禁されていたのでマルクスと顔を合せることはできなかったわけである。それからマルクスはパリを追われてロンドンに落着いたが、この地で多くの同志と共に共産主義同盟を再組織した。この頃、マルクスは、これまでの革命運動の失敗にかかわらず、なお革命到来の近いことを確信していた。マルクスがエンゲルスと共同で、一八五〇年三月、同盟の名で起草した回章はよくこの間の消息を伝えている。この文書は当時のマルクスの思想とブランキのそれとがいろいろの点で一致していたことを明らかにしている。その諸点というのは永続革命の標語、地下活動の是認、フランスを革命の発火点とみ、パリを革命のバベルと確信すること、プロレタリアの武装、唯一不可分の共和国、社会主義者を自称するプチ・ブルジョワに対する攻撃、ブルジョワ民兵の武装解除等であって、これらの諸点の外に右の回章は革命直後に国民議会を選挙すべきことや、政権確保のために一時的にプチ・ブルジョワ的要素を支持すべきことなど、かねてブランキが極力排撃したことなどを是認しておって、マルクス・エンゲルスによって代表される同盟の見解とブランキのそれとは無論、完全には一致したわけではないが、しかし基本的な諸点において、マルクス—

エンゲルスの戦術がブランキのそれとは異っていないことはたしかである。[1] こんな状況であったのでマルクスとロンドンに亡命していたブランキ派の一部の人々との提携が行われるに至ったことは少しも不思議ではない。すなわち、一八五〇年四月、ロンドンに、「万国革命的共産主義者協会」(Société universelle des communistes révolutionnaires) が設立されたが、その中にマルクス主義者、ブランキ派、チャーチストが共存していたことはまことに注目すべきことである。この事実から見ると、マルクス・エンゲルスが、ブランキ派や一部のチャーチスト達を自分達の科学的共産主義に最も近いものと考えていたことは疑を容れぬ。無論、殆ど常に監禁の身であったブランキは直接これに関係しなかったけれども、これらのブランキ派の人達とは常に連絡を保っていたことであるから、マルクス派との提携は了解済みのことと考えてよい。

（1）Dommanget; op. cit., p. 377—378.

この新設「協会」の規約は六条から成っており、その第一条は、結社の目的を規定しているが、それは共産主義同盟規約第一条を敷衍したもので、この中に、共産主義者はプロレタリア独裁を目指すものであるとの言明が初めて明確に示されていることは誠に注目すべきことである。いわく、結社の目的はすべての特権的階級の廃除、共産主義の実現まで、革命を永続させることによって、これらの諸

階級をプロレタリア独裁に従服させることにある。そしてこの共産主義こそは人類家族の構成の究極の形態であるべきものであると。[1]

（1）Dommanget; op. cit., p. 378—379.

第二条は結社の国際主義的性格を強調している。第三乃至五条は組織に関する規定であって、協会の中央集権主義的、独裁主義的、閉鎖的性格を確認しており、そして第六条は協会の決議はすべて投票者数の三分の二の過半数によるべきことを規定している。この文書の下部には創立ならびに中央委員会委員の署名があって、ブランキ派のヴィディール、アダム、イギリスの民主主義者を代表するハーネー、それからドイツ共産党を代表して、マルクス、エンゲルスおよびウィリッヒの名が書かれている。[1]

（1）Dommanget; op. cit., p. 379.

この事実は、ブランキの存命中、ブランキ派とマルクス派とが極めて明確な共通のイデオロギーの基盤の上に提携したことを示すものであって、ひとりブランキとマルクスとの思想上、実際運動上の関連を知る上においてだけでなく、マルクス自身の思想上の発展と変化を知る上においても極めて重要である。ところが、意外にも、この「協会」のことに関しては、マルクス、エンゲルスの著作のどこにも述べられていないのである。この点に関連して、かねてマルクスに対するブランキの影響の重要性を指摘したベルンシュタインが、共産主義者同盟時代のマルクス、エンゲルスの著作は大体においてバブーフやブランキの精神に貫ぬかれており、殊に「共産党宣言」の革命的実行綱領は徹頭徹尾ブランキ的である。マルクスの「フランスにおける階級闘争」「霧月十八日」などにおいてはブランキ派がプロレタリア党として描かれている。しかし一八五〇年三月の共産主義者同盟の回章におけるほど強くかつ大胆にブランキの精神が表現されているところはないと言っている[1]のは、決して過言ではないと思う。

（1）Bernstein; Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. 9. Ausgabe, 1920. p. 62—63.

四

「万国革命的共産主義者協会」によるブランキ派とマルクス派の統一戦線も一八五〇年十月頃にはやくも終止符をうたれた。その原因についてはいろいろ考えられるが、根本的なことは、革命到来の時期について、ブランキ派とマルクス派の所見が異ってきたということである。問題はマルクス派側にある。マルクスは革命近しと見るこれまでの見透しに疑問をもつようになった。マルクスは自分の経済学の研究が進むにつれて、現在の経済的恐慌はすでに終っており、新たなる革命は新たなる恐慌の基盤の上においてのみ可能であると確信するに至った。このことが、[1] マルクスをしてこれまでの革命戦術の方式を修正させ、客観的状勢の理解よりも闘争一辺倒を説くブランキ派と袂別するに至らしめたのである。これを最後として両派が再び公に提携することはなかった。

（1）Dommanget; op. cit., p. 384.

一八五二年と一八五三年にはマルクスの「霧月十八日」と「ケルン共産党訴訟事件の暴露」がドイツ語と英語で出版されたが、この時、ブランキはベリルの獄舎に監禁されており、特に監視が厳しいためにこれらの著作を見ることができなかった。一八五九年、ベルリンで出版された「経済学批判」のことも当時コルトとマスカラに入獄中であったブランキの目に触れることはなかった。

一八五九年の大赦で釈放されたブランキは同年十二月、ブラッセルにゆき、そこからさらにロンドンに行き、翌一八六〇年一月までこの地に滞在した。当時マルクスはケンティシ・タウンのグラフトン・テレスに住んでいたので、二人はあるいは会ったことがあるのではないかと一応想像される。リャザノフもドマンジェもこのような推定をしているが、しかし事実のほどは分からない。

一八六七年九月二日頃、「資本論」第一巻がドイツ語で出版された

が、マルクスの努力にもかかわらず売行きが思わしくなかった。フランス人はラファルグ夫妻の手で仏訳されて Le courrier français に掲載されたその序文しか知らなかった。当時、ブランキはブラッセルにいたが、たしかにこの序文を読んでいる。この序文は La liberté belge にも転載されたので、ブランキの目に触れたことはまちがいない。(1)

（1） Le socialiste, 8 an 15 Mars 1908, Karl Marx et le socialisme français. cité dans Dommanget; op. cit., p. 390.

C'est, on le sait, en lisant le Capital que Blanqui ecrivit la plupart des ses notes d'économie politique, fruit des réflexions qu'engendrait-dans son cerveau la féconde oeuvre de Marx.

しかし、ブランキがはたして「資本論」を読んだかどうかということであるが、ブラッケはこれを肯定している。当時ブランキは経済学殊に資本の問題を研究していて、「資本論」からも多くのものを得たというのである。しかしこのことからブランキがマルクスの影響をうけたと断ずるのはいささか速断であろう。たしかなことは、一八六九年四月八日にブランキが「実証主義評論」(Revue positiviste) に掲載されたロベルティの「資本論」に関する論文を批評したことである。しかしブランキが「資本論」をドイツ語で読んだかどうかはわからないが、一八七二年のロア (J. Roy) のフランス版を見たことはまちがいないところである。

このころ、またブランキとマルクスとの間にはしばしば会える可能性があったようである。というのは先ず第一に、ブランキの側近の一人であるシャルル・ロンゲとブランキの大ファンであるポール・ラファルグとは共にマルクスの女婿であり、またラファルグはしばしばブランキと会っているし、その上、一八六九年六月にはマルクスは官憲の目をかすめてパリにきて、ラファルグの家に八日間も滞在している。こんな好機会があったにもかかわらず、ラファルグの書簡によると、二人はこの前と同様にこの時にも遂に会わなかった。(1)

（1） Dommanget; op. cit., p. 391.

五

運命は同じ時代に、同じ目的をいだいて、しかも互に身近に生きた二人の大革命家をついに生涯親しく相語らせることがなかった。マルクスは、生涯遂にブランキと膝を交えて語ることもなく、思想、行動の上で一度びは相寄ったものの、やがて彼と離れて独自の道を歩くに至ったが、しかしブランキに対しては、終生温い友情をもち続けていた。

たとえば、一八五一年三月、マルクスは、二月廿四日に催された二月革命記念国際大祝賀会(平等主義者の祝賀会)でその主催者がブランキから寄せられた乾杯の辞を読み上げなかった非礼を憤って、自分でこれを翻訳してこれをケルンの共産主義者同盟の本部に送り、支部に配布するように依頼している。

一八六一年には、マルクスは度び重なるブランキの逮捕に心から同情して、三月頃から九月頃にかけて彼の救援のために百方奔走した。三月にはハッツフェルド伯爵夫人との交渉にもとづいて、ブラッセルで医者をしているフランス人のブランキ主義者ワトーに手紙で、ブランキ救援活動の準備に着手したことを伝え、五月には同夫人に、ルイ・ボナパルトの指図で、ブランキが、獄中で残酷な取扱をうけていることを詳しく伝え、六月には同夫人に手紙で、彼女の交際先きを通じてブランキに対する獄中での残酷な取扱を新聞に報道させ、ブランキの釈放を訴えるように要請した。このようなマルクスの尽力に対して、ワトーはブランキ擁護のための小冊子発行資金の援助のことでマルクスに手紙をかき、マルクスと「ドイツのプロレタリア党」がブランキに示した同情に対して心から感謝している旨のブランキの伝言を伝えている。(1) いずれにしてもブランキのために、マルクスはかつて他のフランス社会主義に示したことのない友情をもって尽力した。ブランキ側の人々もマルクスの示した友情と好意に心からの感謝を表した。マルクスの書簡には、自分の行為によってブランキ党との旧交を温めることができたことを心から嬉しく思う旨のことが書かれている。(2)

（1） Karl Marx. Chronik seines Lebens in Einzeldaten. zusammengestellt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau. 1934. 邦訳「マルクス年譜」二六三―三六九。

（2） La revue marxiste. cité dans Dommanget; op. cit., p. 389.

六

社会主義者にはまことに珍しいことであるが、ブランキの全生涯は祖国フランスに対する愛国心によって彩られている。一般に社会主義者といえば、その性質上、国際主義的傾向に富む人々が多いのであるが、ブランキはこの通念を越えて珍しく強烈な愛国心の持主である。ナポレオン時代に生れた彼は自分の父(1)がフランス共和国の領土に引き入れた外国軍隊の暴状を忘れることができなかった。晩年彼は戦争が労働者にとって危険であることが、ますます明らかとなるに及んで、比較的に平和主義的にはなったが、しかし彼はフランスに対する強い感情的な愛国心を決してすてることはなかったのである。

（1） ブランキの父 Dominique Blanqui はジロンド派の国民議会議員、後にナポレオン政府の官吏となる。

普仏戦争に際して、彼は国民の愛国心を鼓吹して、敵前の国民的

団結のために自分の政治的目的を抑制することを敢て辞せず、憎むべきプロシャに対する政府の和平工作に極力反対した。彼の憎悪はパリの冷淡な防衛者達やパリの前に姿を現わしたドイツの「野蛮族」[1]に向けられた。後々のフランス人達は、ドイツ人をラテン人種の破滅のためにささげられた残忍な野獣であると性格付けたことに深い喜びを感じている。このような感情を彼は実際にはすでにドイツのフランス侵寇以前から抱いていた。すなわち、一八六六年頃、ブランキはフランス政府とは反対にビスマルクの政策を、かねて疑惑と恐怖とをもって注視していたのである。当時、彼は、プロシャ国民は市民の国民ではなく、奴隷の軍隊であって、かつてのタタール人のように、ドイツ国民に襲いかかっているのであるといっている。

（1） Blanqui; La patrie en danger, p. 19.

このようなブランキの激しい民族主義的反感はひとりドイツにだけ向けられたものではなかった。彼によれば、イギリスは資本主義的搾取の古典的本場であって、[1] アングロ・サクソン人種が植民地人民に与えた恐怖と圧制とは断乎として非難さるべきものである。[2] ブランキはイギリスが文学と民主主義の発展に貢献したことを多とすると共に、イギリスにおける資本主義的搾取の激しいことが高度の革命的潜在勢力をはらんでいることを認めた。

（1） Blanqui; Critique sociale, II. p. 207.
（2） Blanqui; Critique sociale, II. p. 73.

アメリカ合衆国に対するブランキの態度もほぼ同様であった。アメリカは十九世紀の多数の急進主義者にとって正しく共和主義の殿堂と見られたのであるが、そのアメリカに対してすら彼は好感をもつことはできなかった。彼によれば、アメリカは大富豪の国であって、その国民の社会問題はこれまで自由地の存することによって解決されてきた。だから自由地が涸渇するに至れば、必ずや大動乱が起るであろう。というのはアングロ・ゲルマン人種は、われわれに較べて遙かに利己主義的であり、非社会的であるからであると。[1]

（1） Dommanget; Blanqui à Bell-Ile. p. 180.

彼の民族主義的反感はイタリアに対しても向けられた。たとえ被圧迫民族の独立運動であっても、もしそれが僧侶主義や反社会主義やもしくは反フランス精神に通ずるものであれば、ブランキは決してこれを是認しなかった。ブランキによればイタリア民族主義がこの類いであった。マッチーニはフランスの知的、政治的優越を羨望するのあまり、フランスが人類を解放したことをヨーロッパ人に忘れさせようと企てた。ガルバルディーすらフランスと名のつくすべてのものの勁敵であるとみなされた。マッチーニもガルバルディーも共にニースの出であったが、二人とも反フランスの方向に行ってしまった。このようにブランキは述べて、イタリア人の年来の悲願であるリゾルジメントーの運動を迷信であり、僧侶にふみにじられた、しかもブルジョワ的な反フランス運動であるときめつけた。

以上述べたところからみるとブランキはいかにも度し難い偏狭な民族主義者ではなかったのかという疑をもつが、事実は必ずしもそうではなく、彼は、各国のプロレタリアの利害は共通であって、全世界の資本家に対抗するために各国のプロレタリアが国際的に提携して戦うべきことを説いている。「すべての国々の労働者はすべて兄弟であって、その敵はただ一つ、すなわち、兄弟を戦場での殺し合に駆り立てるところの圧迫者――これである。[1]」と。

（1） Blanqui; Instructions pour un pris d'armes.

このような彼の愛国心――フランス偏重の精神――は彼の社会主義革命の理念とはいかなる関係に立つであろうか、一般的にはこれら二つのものは極めて調和し難いものとみなされているが、ブランキにおいては統一的に理解されている。

ブランキは祖国フランスを熱愛する。それはフランスのみが人類の最高の大志を具体化しているからである。実にフランスは、その行動的精神によって、自国の腐朽した諸伝統を破壊し、他国民の解放のために最大の貢献をなし、他国民の範とすべき「平等原理」の担い手となったからである。[1] このような祖国フランスのみが、よく世界指導の大使命に価する。従って社会主義革命の主導的役割は当然フランスに与えらるべきものである。このような見地から、ブランキはフランスを社会主義革命の本山とも、発火点とも考える。この革命はまずフランスに起るべきである。全世界のプロレタリアはパリの警鐘の音を合図に決起すべきである。だからフランスの制度が反動的のものであればあるだけ、それだけ、これを直ちに転覆すべきフランス人の責任は重い。フランス社会主義者は自ら世界革命の種子をまいたのであるから、他国における革命勢力の緩慢な結実を待つことはできない。このようにブランキは説くのである。

（1） Blanqui; Critique sociale, II. 126―127.

ここに彼の愛国心とその革命思想が、内的に深く結び付きをもっていることがうかがわれると同時に、彼の愛国心がその本質において、世の所謂、盲目的、反動的な愛国心と根本的に異ったものであることがわかる。

七

十九世紀初期の急進主義者達はフランス大革命という自分達の身近に起った振天動地の大事件から、あるいは思想上に、あるいは実践上に、多かれ少なかれ何らかの教訓や暗示を受け取らないものは

なかったが、無論ブランキもその例に洩れない。殊にブランキの場合は、その父ドミニクが国民議会におけるジロンド派の名士として革命渦中の一人であり、後にナポレオン帝制下に高官を勤めた人物であっただけに、この未曽有の事変からうけた感動が一入であったであろうことは容易にうなずけるところである。

ブランキはすでに若くして「フランス革命」に刮目し、これに深く傾倒したが、しかし彼は決して、この大演劇に主要な役割を演じた革命家達をすべて無差別に礼讃するようなことはなかった。たとえばラファイエットや、デュムリエや、ジロンド派の人々に対しては、あらわに軽侮の眼を向け、ジャコバンの領袖ロベスピエールの如き人物に対してさえ敬意を払うことを止めた。彼はラファイエットやデュムリエ等を彼自身が後年「愛国者の仮面をつけた君主主義者」として最も軽蔑したところのガンベッタ一味に擬し、ジロンド派についてはその主張する反パリ的連合主義の故に特に彼等を嫌悪し、十九世紀に入って所謂「一八四八年の山岳党」を組織したところのルドリュー・ローランやその他の自称ジャコバン達をジロンド派の伝統を汲むものに外ならぬときめつけた。「一七九三年の山岳党」に対するブランキの態度はこれと大いに趣を異にした。山岳党は未来社会の建設に関する真の科学を持ち合せてはいなかったが、しかしこの未来社会の発展の萌芽を含んだ「人権宣言」を起草した功績をブランキは高く評価した。彼によれば十九世紀の山岳党の亜流達は「人権宣言」の伝統を石化し、「ユダヤ的な文字礼拝」によって、この宣言の精神的な力を破壊してしまった。本物の山岳党はすでに死んでしまったが、社会主義こそその唯一の後継者であるというのである。

ジャコバンの遺産についてもブランキはこれを無差別に承認しようとはしなかった。ロベスピエールの名と関連した諸傾向を彼は露骨に排撃した。彼はロベスピエールを、「最高存在の礼拝」を提唱して、純粋の無神論をすてたその宗教的傾向と偽善的な個人的権力欲のために最も激しく非難し、さらに彼を自分の地位を強化するために国王の意を迎えて故意にクローツを殺害しヨーロッパの僧侶の意を迎えてショーメットを倒した「早熟のナポレオン」と酷評した。

ブランキはジャコバン党の極左派の指導者エベールとその派の人々に深い同情をもっていた。[1] それは、彼によれば、この一派の人々が革命的熱意をもって常にパリの大衆と密接に接触し、キリスト教を排撃して徹底的な無神論を提唱したからである。ブランキはエベールリズムの行動を絶対に必要な革命的意志の具現として称讃した。[2]

(1) Jacques René Hébert (1757—1794) 通称 Père Duchesne. 一七九三年中急進的市民、無産者の支持をうけてエベール派を結成した。

(2) Spitzer, Alan B.; The revolutionary Theories of Louis Auguste Blanqui. 1957. p. 125.

このようにエベール派に対して並々ならぬ共鳴を示してはいたものの、ブランキは決してその亜流ではなかった。彼の社会主義がこのことを許さなかった。しからば何がブランキを一個の単なる政治的急進主義者から革命的社会主義者に転化させたかといえば、その主因はフランス革命の末期に発生した「平等者陰謀」の指導者バブーフの思想と運動である。そしてバブーフの思想と運動の史実を直接に彼に媒介したものは「平等者陰謀」の残存者の一人で「バブーフの所謂平等のための陰謀」(Conspiration pour l'Égalité dite de Babeuf, 1828) を書いたイタリア人ブオナロッチ (Ph. Buonarroti) である。次に両者の関係について少しく述べよう。

八

ブランキとバブーフ主義とこれを媒介したブオナロッチとの関連を明らかにするには少しく遡って大革命以後におけるフランスの政治運動の概況を知っておくことが必要であろう。

一七九七年五月バブーフの刑死とブオナロッチ、ゼルマン等幹部の国外追放とによって「平等陰謀」の幕はおろされ、いち早くおし寄せた反動の巨波にバブーフ主義は一応その姿を消してしまった。一七九七年十一月、ナポレオンは第一総督に挙げられ、越えて、一八〇二年終身総督となり、さらに一八〇四年五月、帝位につき、以来一八一五年の没落までに至る約十年間、フランスは無論のこと、事実上全ヨーロッパに君臨し、ここにいわゆる光輝あるナポレオン時代を現出した。抗争と流血と恐怖に明け暮れた十年間にわたる生活に極度に倦み疲れ果てて、ひたすら平静と秩序を待望していたフランス国民は、今や眼前に見る帝政の偉大さと美観とに全く魅惑されてしまい、労働者階級さえも自ら大国民に属することを、いたく光栄として、あえて不平等の不幸を反省する慣習をすら失ってしまった。[1] この時代を通じて共和主義の努力は殆どどこにも認められなかった。それでは共和主義は果してほんとうに忘れてしまったのかといえば、決してそうではなく、実は、ナポレオンの政府が、この十年の間、国民に共和主義の忘却を強いたのであるが、この政策は昨日の革命の余熱がまださめきれないで、共和主義といえば革命のことであり、革命といえば直ちに恐怖政治を連想していた大部分の国民の心理に投じて、その抵抗に会うことがなかった。そんなわけで共和主義再建の努力は事実上、どこにも見ることはできなかった。

(1) Sencier, Georges; Le Babouvisme après Babeuf 1912. p. 33.

ところがナポレオンが失脚して、ルイ十八世が諸外国の勢力に擁せられてフランス王の地位にのぼり、ブルボン王朝が復興されると事情は一変した。思うにブルボン王朝の復興は諸外国の勢力によってフランス国民の上に強制されたもので、決してフランス国民多数の承認を得たものではない。それゆえにその政府もまた決して正当

のものとはいえない。このような見解がウィーン会議や神聖同盟におけるフランス政府の信用失墜やフランス政府の冷酷、無能な労働政策等と相まって、はやくもブルボン王朝打倒の運動をよび起した。このような形勢が久しく姿を潜めていた共和主義を再燃させることとなったのであるが、その運動は誰よりもまず、青年、知識階級殊にパリの学生達をとらえた。

この共和主義の運動と相ならんで、当時すでにいわゆる空想的社会主義が発生していたことにわれわれは注意しなければならぬ。たとえばサンシモンの著作「一ジュネーヴ住民の書簡」はすでに一八〇二年に出版されており、同じく「産業組織」は一八一九年に、「産業者の政治問答」は一八二四年に公刊されており、またフーリエの処女作「四運動理論」の出版は一八〇八年のことであり、「農業家族組合論」は一八二二年、「新産業世界」は一八二九年に刊行されている。しかし、サンシモンやフーリエの教説が書斎から出て、共鳴者を得て、実際運動に乗ったのは一八二〇年代の終り頃からのことであって、王政復古以来、行われた急進運動の主力をなすものは、サンシモン主義でもフーリエ主義でもなく、復古ブルボン王朝の倒滅を直次の目的とした共和主義の運動であって、その中には共和的民主主義者、ジャコバン派、山岳派、ロベスピエール派、バブーフ主義者等の異分子を含んでいたのである。(1)

(1) Zévaés, Alexandre; Auguste Blanqui, patriote et socialiste français. 1920. p. 6—7.

一八一八年九月、パリに「真理の友」(Les Amis de la Vérité)と称する秘密結社が生れた。その指導者の中には後にサンシモン主義者として有名になったバザールとビュシェーの名が見いだされる。この結社の直接の目的はブルボン王朝の打倒にあったが、その指導者達がいずれも共和主義者であり、またナポレオン嫌いであったことから見れば、この結社の窮極の目標はたしかに共和主義の実現にあったことは疑いないところである。(1) ナポレオン没落後に復位したブルボン王朝のルイ十八世(在位一八一四年—一八二四年)はウィーン会議後の反動的風潮に乗じて、旧制度へ復帰し、ヨーロッパの自由主義運動の弾圧に協力するなど一連の反動政策を行ったので、次第にフランスの革新勢力の反感を深めつつあった。このような政状の中に「真理の友」は結成されたのであって、その会員としてパリの多数の青年や学生等を獲得したが、思想的に見れば共和主義者を始め、ボナパルト派、王党異分子、それに少数のバブーフ主義者をも含んでいた。一八二〇年、選挙法の反動的改正の問題に端を発したパリの騒擾事件の余波をうけて、この結社の指導部は四散してしまった。(2)

(1) Weill, Georges; Histoire du parti républicain en France (1814—1870). Nouvelle ed. 1928. p. 10.

(2) Blanc; Histoire de dix Ans. Nouvelle Ed. T. I. p. 84, 92. Sencier; op. cit., p. 36.

九

「真理の友」の解散の跡をうけて、一八二一年五月、「フランス・カルボナリ」(La Charbonnerie française)と称する秘密結社が新たに生れた。この結社はブランキが生れて始めて参加した最初の政治的秘密結社であるという点で意味深いばかりでなく、その組織や戦術の方式がひとりブランキにとってだけでなく、彼を通じて広くその後の政治運動や社会運動の上の不抜の伝統となり、ひいては今日の国際共産主義運動の基本的なパターンとなっているという意味で一層われわれにとって重要であると思われる。

政治的秘密結社「フランス・カルボナリ」のカルボナリ(charbonnerie)はイタリア語のcarbonaroの訳語であって、直ちにイタリアの「カルボナリ」との密接なる関連を思わせる。事実「フランス・カルボナリ」はその組織、戦術の方式において、全くイタリヤのそれを模倣してつくられたものであって、いわばイタリア・カルボナリのフランス版といって差支えないと思う。

イタリアに「カルボナリ」(炭焼党)(1)という政治機密結社が生れたのは一八一九年のことである。

(1) 炭焼きはイタリアでは最も卑賤な職業とされているが、自由主義者は支配階級に対抗するために故意にこのような名称を選んだといわれている。

ナポレオンのイタリア征服は、イタリアにおける自由主義思想を刺激し、イタリア人の国民意識を高揚した。しかるに一八一五年のウィーン体制はイタリア人をひどく失望させ、殊にオーストリアの度重なる干渉と圧迫とに対して極度の反感をいだき、外国の支配から脱して、民族の自由と新しいイタリアの統一の実現を目指して、多くの政治的秘密結社が相ついで結成された。その中で最も有力であったものが、ここにいう「カルボナリ」であって、ナポリ王国を初めイタリア全土に亘って多数の党員をもち、一八二〇年にはフェルディナンド七世の苛酷な反動政策に反対して、ナポリに革命を起し、国王に迫って立憲制を復活させたが、メッテルニッヒは四国同盟を背景にオーストリア、フランス両国の武力をもってこれを鎮圧した。

これよりさきフランスでは、さきに述べたように、「真理の友」事件があり、これに連坐して国外追放の刑をうけたDugied, Joubertの二人の革命家はイタリアのナポリに亡命したが、時恰もこの地は革命騒ぎの渦中であった。彼らも「カルボナリ」に加わって革命のために活動したが、革命の敗北によって、辛うじてフランスに帰ってきた。イタリアから「カルボナリ」の組織や戦術方式の秘密を持ち帰った前記の二人は、これを「真理の友」の幹部の人々(Bazard,

Buchez, Flotard[1] に示し、彼らと相計って右の方式に則って、ブルボン王朝の打倒を直接目標とする政治秘密結社をつくることとなった。

（1） Bazard は後にサンシモン派の指導者となり Bucher も一時サンシモン派に属したが後にキリスト社会主義に転じた。

もともとイタリアのカルボナリ党の方式は宗教的、神秘的性格が余りにも強く、そのままでは到底フランスに移植することはできないので、これをフランスの知識層のより合理的思想に調和するように翻案し修正しなければならなかった。こうして一八二一年五月、「フランス・カルボナリ」という秘密結社が生れるに至った。

さきに解散した「真理の友」と同様に「フランス・カルボナリ」も決して純粋に共和主義を奉ずる結社とはいえないのであって、むしろ種々異った原理を奉ずる分子から成るところの、いわば一種の妥協的な結社とも過渡的な団結とも見るべきものである。[1] 思想的に見れば共和主義者の外にボナパルト派、王党異分子、ブブーフ主義者等があり、職業的には士官、兵士、学生、熟練職人等が含まれていた。党はまたたく間にパリ全市に広がり、まもなく地方都市に及び、当時、フランスはカルボナリの細胞網に蔽われたといわれている。

（1） Tchernoff; Le parti républicain sons la monarchie de juillet. 1901. p. 48.

「フランス・カルボナリ」の中心思想は決して明確なものでなかったが、バザール、ビュジェー、フロタール等の指導者の共編した党文書には大要次の如き意味のことが書かれていた。

権力は権利でなく、しかもブルボン家は外国人の手で再興されたものであるから、カルボナリ党員は、フランス国民に対して、国民に適合した政府を選択する権利の自由なる行使を与うるために結束するものである。それは国民的主権の何物かであることを明示しないで、それを布告することである。用語は曖昧であれば「それだけ一層よく、いろいろな怨恨や憎悪に応えることができる。だから大規模に陰謀を起すことである。絶大な熱意をもって。しかも、未来を考えず、予備的な研究もなく、ただ、あらゆる奔放な感情の赴くがままに。[1]」

（1） Blanc, Louis; Histoire de dix ans T. I. p. 98—99.

また当時の警察密偵として種々の秘密結社に潜入し、活動して「秘密結社と共和党の歴史」を著したド・ラ・オッド[1]のいうところも大体それを裏書している。すなわち、カルボナリ党は確乎とした原理をもたなかった。ブルボン家の打倒を目指すところの意見ならばいかなる意見でも受け入れたといっている。[2] 要するにそれはブルボン王政に対する組織的抵抗であった。統一的なイデオロギーをかかげることはブルボン王朝打倒のために共和主義者、戦闘的ボナパルト派、オルレアニスト、新ジャコバン派の統一的な協力を求めることを不可能にする結果になる。このような意味からカルボナリは行動に重点をおく。従ってその原理の稚拙曖昧であるのにくらべて、その組織は極めて強力で驚嘆すべきものである。[3] ここでその組織の方式の詳細を語るいとまがないが、[4] その組織形態が驚嘆すべき機動力と浸透力と秘密保持力を備えており、軍隊的に厳格なヒエラルヒーによって貫ぬかれたピラミッド型の中央集権的の細胞組織であって、十九世紀以後の種々な秘密結社を初めとして、今日の国際共産主義運動などによって、多かれ少なかれ採用されているという事実を指摘しておきたい。

（1） de la Hodde; Histoire des sociétés secrètes et du parti républicain de 1830. à 1848. 1850. p. 22.

（2） de la Hodde; op. cit., p. 22.

（3） Blanc; op. cit., p. 99.

（4） de la Hodde; op. cit., p. 21—22. Blanc; op. cit., p. 99—101 に詳しい。

ブランキに関する断片

ブランキ自身の筆に成るという草稿によると、一八二二年、十七歳の時に彼はカルボナリ党の処刑の現場を目撃し、犠牲者達の悲惨な運命にいたく感動して、直ちに「カルボナリ」に加入して、彼らのために復讐を誓ったという。彼が加入した頃の「カルボナリ」は、すでにその最盛時をすぎてはいたが、この党の強い行動主義的傾向は実践的行動を軽視するところの種々な理論を好まないという彼の性向によく合致した。彼はすでに一八二〇年代の終り頃の学生デモや暴動に大いに活躍し、一八二七年の暴動では最初の負傷をした。そして一八三〇年頃にはすでに不屈な行動主義的人間の型に鍛え上げられていたのである。[1]

（1） Spitzer; The revolutionary Theories of Louis Auguste Blanqui. 1957. p. 132.

十

すでに一個の革命主義者、行動主義者にまで成長したブランキに共産主義のイデオロギーの洗礼を与えたのは、ブオナロッチであった。「平等陰謀」に連坐して、一七九七年五月、追放刑をうけたが、一八三〇年七月、いわゆる「七月革命」が勃発したことを耳にすると同年八月再びフランスに渡来して政治活動を初めたが、しかしつとめて表面に出ることをひかえた。かつて総裁政府時代バブーフと共に「平等陰謀」のすぐれた理論家、組織家として活動したように、七月王政下においても、多くの若い民主主義者を訓練し、激励し、

指導して、衆望をあつめ、大革命の思想の継承者、真の民主主義伝統の使徒、平等の聖火をかかげる禁断宗教の大説教者であると尊敬をうけた。しかし彼はひたすら自分の行動をかくし、政治問題については殆ど筆をとるようなことはなかった。彼は自分がかねて監視をうけているのを知っていたので、ルイ・フィリップの警察に口実を与えることを好まなかったのである。(1) しかし、彼の名声は次第に高まり、同志も日を追うて増加した。彼らは一八三二年頃からブオナロッチの指導の下に、さきに彼がベルギー亡命中、「平等陰謀」の真相とバブーフの教説の解明のために書いた「バブーフの所謂平等陰謀」(conspiration pour l'égalité dité de Babeuf. 1828)を教材として、バブーフ主義の研究を初めたので、革命時代以来久しく死灰同様の状態であったバブーフ主義の価値が再認識されて、これに対する人々の関心も高まり、ブオナロッチの隠家を訪れるものも次第に増加したが、ブオナロッチはこれらの訪問者との会談を通じて、バブーフ主義の解明と鼓吹とに大いにつとめた。これらの訪問者の中にルイ・ブラン、ラスパイユ等と共にブランキの名が見えていることは誠に意義深いことである。無論このようなブオナロッチとの交遊を通じて、直ちにブランキがバブーフ主義の影響を身につけるに至ったと断定することはできまいが、彼がこれまで革命史や「フランス・カルボナリ」の運動などを通じて、断片的にしか知ることができなかったバブーフ主義を初めて系統的に、しかもその最高権威者の口から親しく学ぶことができたであろうということは疑をいれぬ。このことはブランキの思想生活を知る上において極めて大切なことである。

(1) Robiquet, Paul; Buonarroti et la secte des égaux. 1910. p. 187—188.

しかし、この頃からブランキが急速にバブーフ主義に傾きつつあったものと推定される理由は彼がその主役をつとめたり、あるいは自ら指導した政治結社である「民友協会」(La société des amis du peuple)、「人権協会」(La société des droits de l'hemme)、「家族協会」(La société des familles)、「四季協会」(La société des saisons)「民主的ファランジュ」(Les phalanges démocratiques)「平等労働者」(Les travailleurs égalitaires) などが、それぞれ相ついで当初の平和的戦術と共和主義の原則をすてて、暴力的戦術と社会主義の原則に移行したという事実である。(1)

(1) この事実の詳細は拙稿〈バブーフ主義と秘密結社〉三田学会雑誌第二十四巻第六号、Ralea,; L'idée de Révolution dans les doctrines socialistes. 1923. p. 208 以下。de la Hodde, op. cit., Sencier; op. cit.

このようにブランキとバブーフやブオナロッチとの関連が深いのにかかわらず、われわれがブランキのいろいろな著作を読んで、まことに奇異に感ずることは、その中に当然存在すべきものと想像されるところのバブーフやブオナロッチについての記事や引用が全く見当らないということである。ベルンシュタインの伝うるところによれば、ブランキの文書の一部が彼の母の手で焼却されたといわれているが、恐らくこの原稿の中にそのようなものが含まれていたのではなかったかということである。(1) いずれにしても、現存のブランキの著作のどこにもバブーフとブオナロッチに関する彼の記録が見出されないということはわれわれの大いに了解に苦しむところである。

(1) Spitzer; op. cit., p. 126—127.